

THIS IS THE  
GOSPEL

04

旅路



# THIS IS THE GOSPEL

01: 召命

02: 関係

03: 追求

04: 旅路

## 学び方

学びのフォーマット（順序）：読む、話し合う、適用する、委ねる

- この手引書を読む。
- 内容を話し合う。質問に答える。
- 発見した真理を、祈りながら適用する。
- 神が私たちに委ねたことを、ほかの人に委ねる。

## 学びが効果的な理由

第四部（手引書4）は、キリストにある成長に必要な要素の組み合わせで構成されています。

- **関係:** キリスト教を関係という観点から理解することに、焦点を当てています。神があなたの人生で成したい事、あなたの人生を通して成したい事は、すべてあなたと神との関係から溢れて流れ出るようにして成し遂げられるからです。
- **弟子訓練:** イエスは「弟子をつくる」という使命を教会に与えました。信じる者たちが、神を愛し、信仰の仲間とつながり、世に仕え、福音を委ねてイエスを追い求めるときに、弟子はつくられます。それを新約聖書の弟子訓練の範例から学んでいきます。
- **アラインメント（内容の配置）:** あなたの人生に変化をもたらす学びとなるように、キリスト教のさまざまな側面を一つの流れとして分かりやすくまとめています。
- **コミュニティとコーチング:** クリスマン仲間と共に学びの内容を考えて整理しながら、コーチング（指導）を受けることができます。ほかのクリスマンたちと知り合える環境、質問ができて体験を分かち合える環境は、安全な場所です。キリスト教は、コミュニティの中で実現するのです。
- **祈り:** 神に頼って祈りながら学ぶようにうながされます。霊的成長は、あなたが神のために働いた結果、起こるものではありません。神が働いてくださった結果、起こるものです。私たちが祈って神に頼るとき、神が生きて働いてくださるのです。

## 最も重要なポイント

何年も前の話ですが、私は娘たちのために小さな室内用テントを買ってあげたことがあります。箱の中には、12本の短いポールと14本の長いポール、大小21個のブラケット、カラフルなキャンバス、小さな収納袋が入っていました。ところが、肝心(かんじん)な「組み立て説明書」が入ってなかったの

です！そこで、すべての部品を箱から出して床に並べて、箱のフタに載っている、組み立てられたテントの写真を見てみました。でも、正しい組み立て方がさっぱり分かりません。ポールを繋げてみてはまた外し、ブラケットを曲げたりひねったりしながら、力づくで押し込んでみました。そうやって部品を無理やりはめ込んでいきながら、(なんとなくでもテントに見えるように出来上がってほしい)と祈りながら作業をしました。最終的には1時間以上も試行錯誤をくり返し、やっとのことでテントの組み立てが終わったのです。何とも苛立たしい経験でした。

実は、キリスト教に対しても、これと似たアプローチの仕方をする人がたくさんいます。彼らが『キリスト信仰の箱』を開けると、箱の中には「神」「聖書」「イエス」「祈り」「教会」「説教・メッセージ」「礼拝」「洗礼」「聖餐式」「奉仕」「献金」「スモールグループ」「デボーション」「ミッション」など、素晴らしいものがたくさん入っています。ところが、肝心な「組み立て説明書」がありません！どこから始めればいいのか、キリスト教用語をどう理解すればいいのか、まず何をすればいいのか分からない……。箱の中のものをどうつなぎ合わせればよいか分からないと、もどかしく、苦々しい経験をするようになってしまいます。

神の組み立てプランは、主に「神の御霊」「神のみことば」「神の民」という三つの重要パーツを使います。神は、聖霊によって、私たちの人格や性質を変えます。また、真理に導き、正しく生きる力を与えます。そして神は、みことばを通して、真理を教えます。罪を悟らせ、神ご自身の性質・人格を啓示し、永遠のいのちのご計画を私たちが理解できるようにします。さらには、神の民を用いて、私たちが弟子として訓練し、神との歩みを励まし、刺激を与えます。世界に良い影響を与えるように、私たちみんなを一つにします。

第四部『旅路』の目的は、クリスチャンの弟子訓練の枠組みを提供することです。神、聖書、クリスチャン生活、永遠などについて、すべての質問や疑問に答えを提供するためのものではありません。この学びに出てくる事柄についても、そのすべてを語り尽くしているわけではありません。それが目的ではないからです。むしろ、弟子訓練についての話し合いのスタート地点、および、弟子訓練の全体像の基本的理解を提供することが狙いです。学びの目的、神の意図、神の期待、そして、カギとなる概念と真理をよく理解することが、キリストにある飛躍的な成長に必要な視点・視野を持つこととなります。

## 手引書の使い方

この手引書は、スモールグループ、または、マンツーマン指導での弟子訓練のために使うのが最適です。手引書の内容は、箇条書きの要点と簡単な説明の組み合わせで書かれています。細かいことにこだわり過ぎないようにしながら、十分な説明がされています。なので、自然な会話の流れを作ってくれるはずですよ。

この手引書は、「弟子として自分も成長しながら、弟子をつくりたい」という人たちのために作成されました。私たちのスケジュール帳には、夜遅くまで用事や予約が書き込まれていて、週末にも予定がぎっしり詰まっています。そんな中で、弟子をつくる時間を確保するのは大変です。だからこそ、私たちが気軽に人と会っているお昼休みやコーヒータイムに、または、スモールグループなどの集まりで、キリスト信仰に欠かせない本質的な真理を委ねていけるように書かれています。

## 手引書の内容

- 第1章: 福音って、なに？
- 第2章: キリスト教の本質って、なに？
- 第3章: キリスト教のゴールって、なに？
- 第4章: どうして神と時間を過ごす必要があるの？
- 第5章: どうして聖書は重要ななの？
- 第6章: 祈りについて、何を知っておけばいい？
- 第7章: 弟子って、なに？
- 第8章: キリストにつき従うって、どういうこと？
- 第9章: 弟子はどうやってできるの？
- 第10章: 私は何者？
- 第11章: 弟子として、どう歩めばいいの？
- 第12章: どうして教会は重要ななの？
- 第13章: 神の国って、なに？
- 第14章: 学んだ事を、どうすればいいの？

## 必要なもの

聖書箇所のはほとんどは、本文中に書き出されています。自分の聖書に印をつけたり書き込んだりしたい人は、聖書を持参してください。スマートフォンに聖書アプリを入れるチャンスがあれば、そうしておくと思えます。なお、参加者全員が弟子訓練ガイドブックをもらうので、各自、自分のガイドブックに名前を書くなどしてしっかり管理しましょう。



学びのグループ・メンバー

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_

名前 \_\_\_\_\_

携帯番号 \_\_\_\_\_ Eメールアドレス \_\_\_\_\_



目次

第1章:福音って、なに? . . . . .	6
第2章:キリスト教の本質って、なに? . . . . .	10
第3章:キリスト教のゴールって、なに? . . . . .	15
第4章:どうして神と時間を過ごす必要があるの? . . . . .	19
第5章:どうして聖書は重要な? . . . . .	22
第6章:祈りについて、何を知っておけばいい? . . . . .	26
第7章:弟子って、なに? . . . . .	30
第8章:キリストにつき従うって、どういうこと? . . . . .	35
第9章:弟子はどうやってできるの? . . . . .	38
第10章:私は何者? . . . . .	42
第11章:弟子として、どう歩めばいいの? . . . . .	47
第12章:どうして教会は重要な? . . . . .	51
第13章:神の国って、なに? . . . . .	55
第14章:学んだ事を、どうすればいいの? . . . . .	59



## 第1章

# 福音とは何ですか？

主要ポイント： 福音は、人を救うだけでなく人を聖めて成長させる、神の良い知らせ。福音を超える成長などない。

福音は、神が人類に与えた良い知らせです。私たちは福音の中に、生きる目的や人間の問題や神のご性質など、多くのことを発見します。福音には、いくつかの重要なキーポイントが含まれています。

- 私たちは、神と親しい関係を持つために造られた。  
アダムは、神のかたちに創造されました。神と親しく交わることができる能力を持って創造されたのです。創世記2~3章には、アダムと神との会話、協力、パートナーシップ、関係・交わりが記録されています。
- 神が親しい関係を求めたのは、アダムだけではありません。神は「わたしはあなたがたの間を歩み、あなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる」と言って、イスラエルと契約関係を結びました（レビ記26章12節）。イエスも弟子たちに「わたしにとどまりなさい」と命じました（ヨハネ15章1-10節）。また、イエスを愛する者にご自身を現わすと約束し（ヨハネ14章21節）、弟子たちを友と呼んで（ヨハネ15章15節）、親しい関係の重要性を強調しました。こうした聖書箇所は、すべて関係・交わりを求める神の思いを告げているのです。
- 私たちの罪が、私たちを神から切り離し、神との関係を壊した。  
罪とは、神の律法を破（やぶ）ることです。「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず・・・」（ローマ3章23節）とあるよう

に、私たちはみんな、神の律法を破ったのです。神の律法に違反した罰について、ローマ人への手紙6章23節は「罪の報酬は死です」と言っています。報酬とは、労働や行為に対する稼ぎ・報いのことです。つまり、聖書によれば、私たちのだれもが「死」を稼いだわけです。

聖書が死を語る時、それは主に「神から切り離されること」を意味します。身体（からだ）が死ぬと、私たちの霊が身体から切り離されるのと同じように、私たちは罪のせいで霊的に死んで、私たちの霊は神の霊から切り離されたのです。「むしろ、あなたがたの咎〔罪〕が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり・・・」（イザヤ59章2節）とあるとおりです。

- 私たちは、神との関係を自力で修復（和解）することができない。  
多くの人（良い行いをすれば、神との正しい関係が持てる）と思っています。あいにく、どんな良さがどのくらいあれば神との関係が持てるのか、それを教えてくれる決定的な採点法や明確な目印は存在しません。「普段の行いがほぼ良ければ、神に受け入れられる」とか「善行を三つやれば、悪行が一つ帳消しになる」とか、聖書は言っていないのです。明確な良さの基準がないのに、どれほど良ければ「十分に良い」と言えるのでしょうか。

聖書が指摘する私たちの問題は、善の不十分さではなく、罪の影響・結果です。罪は、私たちに死と惑わしをもたらします。ゆえに、神との関係を修復（和解）することなど、私たちには絶対にできないのです。エペソ人への手紙2章1節が教えているように、私たちはキリスト無しには、自分の背（そむ）きと罪の中に死んでいる者です。それに神の介入が無ければ、この世の神（サタン・悪魔）によって真理に対して盲目にされたままだと、コリント人への手紙第二4章3-4節は言っています。死んでいる人は何もできないし、惑わされている人は信じません。したがって、神との和解のために私たちができることは、何もないのです。

- イエスは、私たちの罪の代価を払うために十字架で死んだ。  
罪の報酬は死です。イエスは、私たちの罪の代価を払うために、十字架の上で死にました。そのイエスの犠牲によって、神との和解が可能になったのです。「敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです」（ローマ5章10節）

- イエスは、私たちが生きるために死者の中からよみがえった。  
罪の代価を支払ったのはイエスの死ですが、永遠のいのちの希望をもたらすのはイエスの復活です。「私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました」（第一ペテロ1章3節）

- イエスは、イエス・キリストを信じて罪を悔い改める者に、永遠のいのち（神との和解・関係）を与える。  
イエスはよく、永遠のいのちについて語りました（ヨハネ3章15-16節、4章14節、5章39節、6章40節）。多くの人（死んだ後に天国に行くことが永遠のいのちだ）と思い込んでいますが、イエスはそうは教えていません。イエスはヨハネの福音書17章3節で「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなた・・・を知ることです」と言われました。永遠のいのちとは、神を知ること、神との和解（親しい関係）を体験することなのです。

聖書によると、イエスが自分のためにしてくれた事を信じて罪から離れる人に、永遠のいのちは与えられます。罪から離れることを、聖書では悔い改めと表現しています。これは「罪の無い人間になる」という意味ではありません。「罪の行いよりも神の方を求めるようになる」という意味です。イエスが初めて語ったメッセージの中心も、悔い改めでした（マタイ4章17節）。

以上、これらは救いに欠かせないだけでなく、救われた者が生きていくためにも欠かせない真理です。キリスト信仰のキー概念と主な教理は、すべて福音メッセージの中に含まれています。下記のワードを考えてみてください。

救い	恵み	愛	赦し
選び	予定説	希望	いのち
義認	贖い	信仰	神の御心
主権	罪深さ	おごり・高ぶり	神に頼ること（信頼）
御国	コミュニティ	謙虚さ	天国
地獄	平安	喜び	祈り
イエス	メシア	神	聖徒

このほかにも、福音メッセージに根差すワードや概念はたくさんあります。つまり、深く福音を知れば知るほど、福音の理解を増せば増すほど、これらの概念をもっと知って理解することになります。

私たちクリスチャンは、福音（の深さやわざ）に成長していくのであって、福音を卒業していくわけではありません。福音を超える成長はありません。



## 第2章

# キリスト教の本質って、なに？

主要ポイント：キリスト教の本質は「関係」。

何が人を「素晴らしい敬虔なクリスチャン」にするのでしょうか？（思いつく事を書いてください）

---

---

---

---

人によって少しずつ違った答えになるかもしれませんが、たいていの人は「祈り、教会に通い、聖書を読んでいる者が、素晴らしいクリスチャンだ」「資金や能力を捧げ、人に仕え、道徳的な生活をしている者が、素晴らしいクリスチャンだ」と考えます。もちろん、これらは賞賛すべきことです。でも、それでクリスチャンを見分けられる（または、素晴らしさを見分けられる）とは限りません。クリスチャンじゃない人にもできることからです。ノン・クリスチャンでも、祈り、教会に行き、聖書を読むことはできます。資金や能力を捧げ、人に仕え、道徳的な生活をすることはできます。

キリスト信仰は、イエス・キリストの福音に始まります。そして、その福音の本質は「関係」です。

福音とは何か。福音は、人を救って聖(きよ)める、神の良い知らせです。エデンの園に始まって永遠にまで続く、贖(あがな)いのストーリーです。すでに福音については詳細な説明がされましたが、ここでは「関係」が強調されている点に注目してください。

- 人間は、神と親しい関係を持つために造られた。
- 私たちの罪が、私たちを神から切り離し、神との関係を壊した。
- 私たちは、神との関係を自力で修復(和解)することができない。
- イエスは、私たちの罪の代価を払うために十字架で死んだ。
- イエスは、私たちが生きるために死者の中からよみがえった。
- イエスは、イエス・キリストを信じて罪を悔い改める者に、永遠のいのち(神との和解・関係)を与える。

イエスはよく、永遠のいのちについて語りました。ヨハネの福音書17章3節では、永遠のいのちをこう定義しています。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです」(ヨハネ17章3節)。永遠のいのちは、神を知ることなのです。だれかを知るとは「関係」の本質です。神の御心は、あなたを「より良いバージョンのあなた」に作り変えることではありません。あなたを、神との正しい関係に導き入れてキリストの似姿にすること。それが神のご計画です(ローマ8章29節)。

キリスト教は、まず人が神との正しい関係に入ることから始まります。そうして神との関係が成立すると、次にキリストがその人を教会(信仰の兄弟姉妹)との関係と世との関係という、二つの重要な関係に導いてくれます。

イエスは、この三つの関係に生きて、その模範を示してくれました。

### • 父なる神との関係

イエスは、つねに父なる神との親しい関係・交わりのうちに生きていました。そして、御父に祈るために、よく人気のない寂しい場所や静かな所へ退いていました。ルカの福音書6章12節に「そのころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた」と書かれています。ルカの福音書5章16節には「だが、イエスご自身は寂しいところに退いて祈っておられた」と記録されています。(その他の聖書箇所・マルコ1章35節、6章45-46節、14章32-34節)

イエスは、全き愛で神を愛することを教えました。マタイの福音書22章37-38節でイエスは「あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、知性を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」と言っています。

イエスは、一生涯、父なる神の御心に従って生きました。自分から来たのでも自分から語ったり行(おこな)ったりしているのでもなく、ただ父なる神のご意志に従っているのだと、弟子たちに告げました。ヨハネの福



音書8節42節に「イエスは言われた。『・・・わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わされたのです』」と記されています。また、ヨハネ5章30節で、イエスは次のように語っています。「わたしは、自分からは何も行うことができません。ただ聞いたとおりにさばきます。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方のみこころを求めるからです」。さらには、ヨハネ8章28節で「わたしが自分からは何もせず、父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していたことを、あなたがたは知るようになります」と言っています。

イエスは、父なる神と二人だけの時間を過ごし、御父を全き愛で愛することを教え、自分の意志ではなく御父の意志に従って生きました。それらすべてが、イエスが何をして何を言ってどこに行くかを、決定づけていたのです。そうしてイエスは、父なる神との親しい関係・交わりの中で生きる人生の模範を示しました。

#### • 教会（イエスに従う者たち）との関係

イエスは、信じる者たち（のちに教会となる人々）との関係の中で生きました。また、イエスの教えを聞きたいと集まってくる群衆に語りました。マタイの福音書5章1-2節には「その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた」と書かれています。

イエスは、少人数の弟子たち（十二弟子）を呼び集めて訓練し、そして送り出しました。マルコの福音書3章14節に「イエスは十二人を任命し、彼らを使徒と呼ばれた。それは、彼らをご自分のそばに置くため、また彼らを遣わして宣教をさせ・・・」とあります。イエスが行ったすべての場所に、弟子たちもいました。彼らは共に働き、共に食事し、共に仕え、共に時間を過ごしたのです。

イエスは、特に3人の弟子たち（ペテロとヤコブとヨハネ）と多くの時間を過ごしました。彼らは、イエスがヤイロの娘が生き返えらせたときに、イエスと一緒にいました（マルコ5章37節、ルカ8章51節）。また、イエスの変容（マタイ17章1節、マルコ9章2節、ルカ9章28節）やゲッセマネの園（マタイ26章37節、マルコ14章33節）という重要な場面でも、イエスと一緒にいた弟子たちです。

イエスの弟子は、互いの間にある愛によってそう認められるのだと、イエスはヨハネの福音書13章35節で言っています。イエスが信仰のコミュニティの中で生きていたことは、イエスの大勢の群衆とのやり取り、十二弟子や一番近くにおいた弟子たちとのやり取りから分かります。そう

生きることで、教会（信じる者たち）との関係の模範を示してくれたのです。

#### • この世（ノン・クリスチャンたち）との関係

イエスは、この世（キリストを通して神と和解していない人々）との関係の中で生きました。イエスは、自らのミッション・使命を「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人（つみびと）を招いて悔い改めさせるためです」（ルカ5章27-32節）と表明しました。そして、罪人たちを救うことを絶対的に重んじて、彼らに手を差し伸べました。マタイの福音書9章10節に「イエスが家の中で食事の席に着いておられたとき、見よ、取税人たちや罪びとたちが大勢来て、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた」と記されています。イエスが評判の罪人たちとも食事をしてきたことは、明らかです。

私たちの主イエスは、井戸のほとりでサマリアの女と話をし（ヨハネ4章7-42節）、姦淫しているときに捕まった女をかばい（ヨハネ8章1-11節）、わざわざ悪名高い取税人のザアカイと食事をしました（ルカ19章7節）。罪人を嫌うことなく、むしろ思いやって深くあわれんだのです。

こうしてイエスは、世と関係して生きる人生の手本を示しました。

まとめ：キリスト教の本質は「関係」です。そして、福音の中心は「神があなたとの親しい関係を追い求める」ということです。イエス・キリストを通して、ひとたび神との正しい関係に入れば、キリストがあなたとの関係を通して生きて働いてくださいます。キリスト教は「神との関係」「教会との関係」「世との関係」という、三つの重要な関係の中で実現されるのです。

さらに踏み込んで考える：あなたの人生で、または、あなたの人生を通して神が成し遂げたい事は、すべて神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられていきます。（この真理は、学びを進めていくと明らかになります。）

キリスト教の本質は、関係です。



## 第3章

# クリスチャン人生のゴールって、なに？

主要ポイント： T基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。

復習:

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。 You were created for a relationship. Sin separated that relationship. There was nothing you could do to reconcile the relationship. Jesus died on the cross for our sins, and Jesus rose from the dead that we might have eternal life. Jesus offers eternal life (or a reconciled relationship) to those who will repent of their sin by placing faith in Jesus Christ.
- キリスト教の本質は関係。神、教会、世との関係が、三つの重要な関係です。神があなたの人生で、また、あなたの人生を通して成したい事のすべては、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられていきます。

クリスチャン人生の基本的ゴール・目的は、二つあります。

- 1) 神を知ること
- 2) 神があなたを通して生きてくださること

クリスチャンとしての基本的なゴール・目的が分かれば、大まかな人生の行路もおのずと見えてきます。それは、「ゴール」が「方向」を定めてくれるからです。

究極的なゴールは、(神と時間を過ごして)神を知ることです。

神がキリストを通して人間に与える賜物は、永遠のいのちです(ローマ6章23節)。そして、永遠のいのちとは、神を知ることです(ヨハネ17章3節)。

私たちは、どうやって神を知るの？

- 神が、ご自身をあらわし示さなければならない(啓示)。
- 私たちは、神が啓示された事を信じなければならない(信仰)
- 私たちは、啓示された方と一緒に時間を過ごさなければならない(関係)。

では、これらを一つひとつ定義しながら考えていきましょう。

神はどうやってご自身を啓示したの？

神は、次の四つのことを通して、ご自身を啓示しています。

- 創造(詩篇19篇1-4節、ローマ1章20節)
- 良心(ローマ2章14-15節)
- キリスト(ヨハネ1章1節、5章18節、8章58節、14章9節、21節、ヘブル1章1-2節)
- 聖書の正典(ヨハネ20章31節、第二テモテ3章16節、第二ペテロ1章21節)

神が啓示した事を信じるって、どういう意味？

聖書は、救いをもたらす信仰を語ります。信仰は、福音メッセージを信じることから始まるものです。聖書が教える救いをもたらす信仰は「知識」「同意」「信頼」という三つの要素から成っています。「知識」とは、福音に関する基礎的な聖書の事実を理解することです。「同意」とは、それらの事実が真理であると認めることです。「信頼」とは、それらの真理に基づいて行動を起こし、キリストを「救いの唯一の希望」として自分のものとする(自分の信条にする)ことです。このように、私たちは知識で理解し、同意で認め、信頼で行動するのです。

次に聖書が語るのは、神が告げられた事を信じる信仰です。神との歩みは、救いをもたらす信仰から始まり、生きた信仰へと続いていきます。信仰は、知的に受け入れるだけのことではありません。信仰・信じるとは、受け入れ

た事にしたがって行動することです。

聖書の中で、神がご自身をどう啓示しているか、考えてみてください。神は「聖なる方」「愛の方」「正しい方」「義なる方」「憐れみ深い方」「主権者」「常にいます方」「全知全能の方」だと、聖書はいいます。でも、それを認めること(同意)と、困難の中で神の主権を信頼したり、試練のときに神の愛を信じたり、孤独なときに神の臨在を確信したりすることは、まったく別です。

神が啓示した事を信じるとは、要するに、神が聖書で語った事への信仰・信頼によって生きるということです。これは、知的な理解以上のことで、私たちの生き方に影響を及ぼすものです。これが、つぎの「啓示された方と時間を過ごすこと」につながります。

神と時間を過ごすには、どうすればいいの？

だれかを知るための唯一の方法は、その人と一緒に時間を過ごすことです。本から学べる事もありますが、その人を本当に知りたければ、一緒に時間を過ごすしかないのです。

例:好きな人と付き合うのは、その人を知ることが目的です。交際期間中は、相手が行きたい場所に一緒に行って、相手が行きたい事を一緒にします。また、相手の性格や考え方、将来の夢やプランなどを知りたいと思います。そうやって同じ時間を共有しながら、相手を知っていくのです。

神との時間の過ごし方(神を知るためにできること)

- 聖書を読む:聖書は、神がご自身をあらわす「神の啓示」です。聖書を通して神がご自身を示すとき、あなたは神を知っていきます。
- 祈る:祈りは、神との会話です。祈りの中で神に話す。祈りの中で神に聴く。
- 神を礼拝する:礼拝とは、神に思いをはせ、神のなさる事に感謝し、神について学ぶことに集中する時間を持つことです。
- 聖書的メッセージや教えを聞く。
- 自然の中で時間を過ごす:神の、目に見えない本性や属性(神に固有の性質)は、被造物によってはっきりと認められます。(ローマ1章)

私たちは神に目を注ぐときに神を知っていく:聖書を読むのは、単に情報を得るためではありません。神を知るために聖書を読むのです。教会には、行かなければいけないから行くのではありません。神を知るために教会に行く

のです。祈るのは、単に自分の必要を神に告げるためではありません。私たちが直面する問題について、神の御心を知るために祈るのです。こうして私たちは、集中した神との時間を過ごすことで、神を知っていくのです。

神との時間を過ごして神を知っていくとき、神は私たちを通して生きてくださいます。キリスト信仰は、あなたが神のために生きることではなく、神があなたを通して生きてくださることなのです。そして神が実際にあなたを通して生きるには、あなたが（神との時間を過ごして）神を知って、神のご計画・御心に従って生きなければなりません。

神（神の御心、神の願い、神の国、神のご性質）を知れば知るほど、神が今あなたを通して生きたいと願っておられることが、ますます分かってきます。このように、私たちの行動・働きは、神との愛の関係からあふれ出てくるものなのです。

基本的なゴールは、（神と一緒に時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。



## 第4章

### どうして神と時間を過ごす必要があるの？

主要ポイント：神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。三つの重要な関係は、神、教会、世との関係です。神があなたの人生において、また、あなたの人生を通して成したいと願うすべての事は、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられます。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。

あなたが神と時間を過ごす、その理由は何ですか？（思いつくことを、いくつか書いてください。）

---

---

---

---



クリスチャンが神との時間を語るとき、それはたいてい、聖書を読むこと、祈ること、礼拝することを指しています。ところが「なぜ聖書を読むのか」「なぜ祈るのか」「なぜ礼拝するのか」と尋ねると、よく以下のような答えが返ってきます。

- 知識が欲しい（もっと知りたいから読む）
- 慰めが欲しい（心を癒されたい、良い気分になるから礼拝する）
- 祈りの答えが欲しい（神の介入が欲しいから祈る）
- 教会からのプレッシャー（やるべきだと言われたからやる）
- 神への従い（神が命じたことだから）
- 罪悪感（やらなきゃダメだと思うから）
- 規律・訓練（やるのが正しいことだから）
- 習慣（いつもやってるから、ずっとしてきたから）
- その他の理由・動機

私たちはいろいろ行為・活動をします。でも、なぜするのかは、何をするのかと同じくらい重要です。それは、動機や理由が大きな違いを生むからです。

たとえば、ある夫が花束を持って帰宅して、それを妻に手渡したとします。妻は感動して「きれいな花束！ でも、どうして？ 何のお祝い？」と尋ねました。もし、夫が次のように答えたら、妻は花束をもらって嬉しいと思うでしょうか。

- 「まあ、ある種の実験だな。君の反応を見て、何をしたら嬉しいのかわかりなかったから」
- 「これは君のためにしたんじゃない。僕自身のためだ。良い事をすれば、気分が良いから」
- 「あとで僕が何か欲しくなったときのために、君に何かあげておいた方がいいと思って」
- 「同僚が、みんな奥さんに花を買って言うから。プレッシャーに負けちゃったんだ」
- 「君が、花が欲しいって言うから。ほらよ！」
- 「最近、花なんかあげてなかったから罪悪感に苛まれた。でも、これで罪悪感は消える」
- 「こういう事を夫は妻にすべきだって本に書いてあった。僕も人として「こういった事をする習慣を身に付けたいんだ」

こんな答えが夫から返ってきたら、妻は嬉しいと思わないはずですよ。なぜでしょう？ それは、夫が花束をくれた理由・動機が、自分を愛しているからであってほしいと思うからです。プレッシャーを感じたからとか、強要された

からとか、そういう癖をつけたいからとか、そんな理由で花束を渡されても少しも嬉しくありません。妻は、夫の行動が愛によって動機づけられていてほしい、妻を喜ばせたいという思いからであってほしいのです。

神との時間も、これと同じです。聖書をもっと知りたい、祈りに答えて欲しいと思うのが、悪いわけではありません。でも、「だれといるか」ではなく「なにを得られるか」が聖書を読む動機や祈る一番の理由なら、何かがおかしいのです。神との時間を過ごす理由・動機は、神を愛しているから、神と一緒にいたいから、神をもっと知りたいからであるべきです。

なぜするのかは、何をするのかと同じくらい大切

神を愛する心から行動していなければ、それは単に形だけの宗教活動です。良い事をしているのかもしれませんが、その理由・動機が間違っています。

あなたが神と時間を過ごすのは、神を愛しているからですか？ それとも、神から何かをもらいたいからですか？ 神との時間を持つときには、その理由・動機を意識的に考えてください。

ディスカッション・トピック

- 「神との時間を過ごす理由・動機」と「クリスチャン人生の全体的なゴール・目的」には、どんなつながり・関係があると思いますか？
- あなたから何か欲しくて知人や友人が近寄ってきた、という経験はありませんか？ そういう関係性は、どんな言葉で表現したらよいでしょう？



## 第5章

### どうして聖書は重要なのか？

主要ポイント：聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。三つの重要な関係は、神、教会、世との関係です。神があなたの人生において、また、あなたの人生を通して成したいと願うすべての事は、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられます。
- 基本的なゴールは、(神と時間を過ごして)神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。なぜするのは、何をするのかと同じくらい重要です。

#### 聖書の基礎知識

聖書は、神が人類にご自身を明かした「神の啓示」です。そして聖書は、聖霊に動かされた人々によって書かれました。聖書は、神の指示・命令を知らせる完全無欠の宝物であり、人類に授けられた宝物です。聖書の著者は神です。なので、そのすべてにおいて誤りはありません。聖書は、神の愛の

深さと神のさばきの原則を明らかにします。人間の行い、教理、宗教的な考えのすべてが、聖書という最高基準に照らされてさばかれます。聖書は、世の終わりまで、人間の信仰と行いを誤ることなく絶対的に正しくさばく、唯一の物差しです。(詩篇119篇89節、マタイ5章18節、24章35節、ヨハネ10章35節、第一コリント2章7-14節、第一テサロニケ2章13節、第二テモテ3章16-17節、第二ペテロ1章20-21節、ヘブル4章12節)

聖書は：

- 霊感による：神によって息を吹きかけられて書かれた(第二テモテ3章16節)
- 無誤(むご)：間違いが無い(特に歴史的・科学的事実に)、絶対的信頼性(箴言3章20-23節)
- 無謬(むびゅう)：誤りやミスが無い、誤って導くことがない(詩篇19篇)
- 唯一：唯一無二(ユダ3)
- 完全：完成した、完全なる神の啓示(ヘブル1章1節、ユダ3)

「神への信仰」と「聖書を読む時間」には、直接的な相関関係がある。神を知っていくと、神への信仰・信頼も成長します。神の御(み)業(わざ)を見て、神がどんな方かを理解して神の御心を知っていくとき、私たちの信仰は強められるのです。

前にも書いたように、聖書は、神がご自身を明かしている「神の啓示」です。「信仰」と「聖書を読む時間」と「神を啓示する聖書」の関係性に注目しながら、次の聖書箇所を読んでいきましょう。

- ローマ人への手紙10章17節に「信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです」とあります。聖書を読むことで私たちの信仰が増すのは、神のみことばが神の御子を示すからです。
- ヨハネの福音書5章39節で、イエスは宗教家たちに「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです」と言っています。つまり、イエスを信じることを拒み、永遠のいのちの希望を聖書に見つけようとしても、その聖書がキリストを示しているのです。神のみことばは、神の御子を指し示します。
- ピリポは、エチオピアの宦官にイザヤ書を説きました。使徒の働き8章35節には「ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた」と書かれています。イザヤ書は、イエス降誕の600年

以上も前に書かれた書です。それなのに、なぜピリポは、イザヤ書からイエスを伝えることができたのでしょうか？ それは、イザヤ書の預言の言葉が、キリストを指しているからです。神のみことばは、神の御子を指し示します。

- ヨハネの福音書1章1節に「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった」とあります。また、ヨハネの福音書1章14節には「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」と書かれています。イエスこそ、聖書でただひとり「父のみもとから来られたひとり子」と呼ばれた方です。神のみことばは、神の御子を示します。
- パウロは、ガラテヤ人への手紙3章24節で「こうして、律法は私たちをキリストに導く養育係となりました。それは、私たちが信仰によって義と認められるためです」と言いました。律法（創世記～申命記）は、私たちの養育係です。つまり、旧約聖書の律法はイエスを指し示すと、パウロは言っているのです。神のみことばは、神の御子を示します。

聖書は、神がご自身を明かしている「神の啓示」です。神は聖書を通して、ご自身の性質・人格を知らせ、御心を知らせてくれます。だからこそ、時間を取って聖書を読むと、神の思いや心や人格を知っていくのです。そうして神を知っていくとき、信仰は増していきます。

いろいろな聖書の読み方がある。

聖書の読み方はさまざまです。人が聖書を読む理由や目的には、以下のようなのがあります：

- 娯楽：個人的な趣味や楽しみで読む。
- 適用：生きるための洞察を得る目的で読む。
- 指導：人に伝える・教えるために読む。
- 学習：知識を得るために読む。
- デボーション：神を知るために読む。

どの読み方にも、それぞれメリットがあります。しかし、QT（クワイエットタイムの略。静思の時）を持つのは、主にデボーション（神を知るために聖書を読む）が目的です。

バイブルスタディの基本原則

聖書を正しく理解して解釈するためには、文脈や背景を知る必要があります。文脈や背景は、聖書が書かれた当時の状況下において、そのときの意図・目的において、もともとの読者に原著者が何を語ったのかをしっかりと理

解して初めて分かるものです。その当時に何が語られたのかが分かるまでは、今日（こんにち）に何を適用すればよいのか分かりません。

聖書の文脈・背景は、どうやって分かるの？

次の五つの質問をしてください。

- 1) 著者：だれが書いた？（もともとの著者はだれ？）
- 2) 読者：だれに宛てて書かれた？（もともとの読者はだれ？）
- 3) 状況：書かれた当時の状況は？
- 4) 目的：なぜ、この書は書かれた？
- 5) 文体：どんな文体スタイルで書かれている？（例・詩歌、歴史的物語、知恵文学、書簡、黙示文学など）

こうした情報は、聖書ガイドブックやスタディバイブルの聖書66巻各書の冒頭に記載されています。また、聖書情報サイト（例・バイブルコア、CGNジャパン）でも入手することができます。（なお、聖書、バイブルスタディ、聖書解釈の詳しい情報については、このガイドブックの最後にある付録1～3を参照してください。）

聖書箇所は、どう自分の人生・生活に適用すればいいの？

- 観察：その箇所は何と言っているか
- 解釈：その箇所は何を意味するか
- 適用：その箇所はどう自分に当てはまるのか

何から始めればいいのか？ まず、読みやすい聖書を手に入れたら、以下に提案することを実行してみましよう。

- 下線を引く、蛍光ペンを使うなどする。余白にメモを取る。神から学んだ事をノートやメモ帳に記録する。
- 読む長さや量よりも、その深さを読み取る。
- 聖書のどこを読むかは、次のことを参考にする：
  - 神があなたにくり返し語られるテーマから始める（例・金の使い方、信仰、怒りなど）。
  - 箴言を読む。箴言は31章あるので、月の日付と同じ数字の章を読む。
  - 特にキリストのご性質と生き方に注目しながら、福音書を読む。
  - 書簡（手紙）を読んで、福音が日常生活でどう実践されるのかを学ぶ。
  - 一年で聖書を通読する。
  - YouVersion聖書アプリをスマートフォンにダウンロードする。（アプリの『読書プラン』には、聖書を学べる読書プランが多数。）





## 第6章

# 祈りについて、何を知っておけばいい？

主要ポイント：祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。三つの重要な関係は、神、教会、世との関係です。神があなたの人生において、また、あなたの人生を通して成したいと願うすべての事は、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられます。
- 基本的なゴールは、(神と時間を過ごして) 神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。

祈りは、神との会話です。難しいことはありません。飾り立てた言葉や詩的な表現を使わなくていいですし、長く祈ったり威圧的な口調や言葉遣いをしたりする必要もありません。聖書は、祈りの仕方を明確に教えています。神との会話である祈りを(1) 神に話す(2) 神に耳を傾ける、という二つの部分に分けて考えてみましょう。

大半のクリスチャンは、祈る時間をほとんど(1)に費やします。つまり、自分の抱える問題や心配事、嬉しかった事や疑問などを、神に話すわけです。

「神に話す」祈りには、いくつかの種類があります。

- 祈り：神に語るということ全般。
- 願い：自分の必要を神に願い求めること。
- とりなし：だれかのために、神の介入を求めること。
- 礼拝：愛や敬意や親しみの思いを神に伝えること。
- 感謝：神が備えてくれた事・与えてくれた事のすべてに、感謝の気持ちを伝えること。
- 賛美：神がしてくださった事に感謝し、神を褒め称えること。

このほかにも、もっと小さいカテゴリーの祈りはあります。でも、基本的には上記したものが、神に向かって話す祈りのほとんどを占めています。これらすべてにおいて、語っているのは私たちです。

しかし、祈りはモノローグ(独り言)ではなくダイアログ(対話)です。つまり、会話でなければいけません。神に自分の思いを伝えるだけでなく、神が私たちに御心を伝えるのにも耳を傾けなければなりません。

祈りのうちに神に耳を傾けるのは、時間を要することです。神の声に対して聞く耳を養うのにも、時間が掛かります。つまり「あなたが(神が言った)と思う事」と「神が実際に言った事」とを聞き分けるのに、時間が掛かるのです。それでも、耳を傾ければ傾けるほど、祈りのうちに神との時間を過ごせば過ごすほど、神の声は明確に聞き分けられるようになっていきます。

## 神の声を聞く力は、どうしたら養えるの？

- 祈りのうちに神との時間を過ごせば過ごすほど、もっと神の声を聞き分けられるようになる。あなたがよく知っている人のことを思い浮かべてください。関係が親しければ親しいほど、その人の声に聞き覚えがあるはずで、相手が名乗らなくても、電話がかかってくる、すぐに誰だか分かる人もいるでしょう(例・親、配偶者、子ども、兄弟、親友)。たくさんさんの時間を一緒に過ごしてくり返し慣れ親しむことでしか、培(つちか)えない親密さがあるのです。神との関係も、それと同じです。神と話をして神の言う事に耳を傾ければ傾けるほど、神の声はもっと聞き慣れた、よく知る声になっていきます。



- どう聞こえるかより、何が聞えるかに集中する。神の声が聞えるということと、神が何を言っているかが分かるということは違います。その違いが分からずに、混乱している人もいます。実際、前者の方が後者より難しいのです。
- もう一度、人と人とのコミュニケーションについて考えてみてください。あなたには、自分の母親の声がどんな声に聞こえますか？ たとえば「女性の声。心地よい声。母の声にはなまりがある。母の声には柔らかさがある」と答える人もいます。すばらしい答えではありますが、実際には、声の持ち主を数十億人にしぼっただけです。
- では今度は、自分の母親が「ウソをつくこと」「神のことば」「家族」「純潔」「健康」などについて何と言うかを考えてみてください。母親のことを知っていればいるほど、何を考えているかが分かります。つまり、母親の声を聞き分けたいのなら、まず母親ではないものを消去することから始めます。
- 神の声を聞き分けるのも同じです。聞こえたと思う神の声が、本当に神の声かどうかを吟味するには、「神がどのようなお方か」を考えてください。そして、神の性質・人格に照らし合わせてみるのです。聞こえたと思う考えやアイデアが、神のご性質・ご人格とかみ合わなかったり聖書と食い違っていたりしたら、消去してよいのです。
- 神の声を聞き分けるのが難しいと感じる人には、次のチャートが助けになるはずです。聞こえた声と呼び起こす感情によって、その声の主を判断することができるからです。（このチャートはChoosing God's Bestという本から引用しています。）

#### 神の声

あなたを安らか・穏やかにする。  
 あなたを導く。  
 あなたを諭(さと)す・教示する。  
 乱させる。  
 あなたを励ます。  
 あなたを慰(なぐさ)める。  
 あなたを落ち着かせる。  
 あなたに罪を悟らせる。

#### サタンの声

あなたを急かす・焦らせる。  
 あなたを駆り立てる・圧をかける。  
 あなたを混  
 あなたを混  
 あなたを落胆させる。  
 あなたを心配させる。  
 あなたを悩ます。  
 あなたを責める・非難する。

- 聞こえた(と思う)事が、聖書に一致するかを確認する。聖書は、神が啓示した神の御言(みことば)です。神の声を聞き分けるには、まず、神がすでに書いた事(聖書)を知らなくてははいけません。神は、決して矛盾する事を言ったりしません。したがって、神がすでに啓示された御言(聖書)に一致しない事を、祈りのうちで語ることはないのです。
- 神は、以下を通して語るのも、これらとの組み合わせで祈りを考える。祈りの中で聞こえた事は、原則として、「聖書」と「聖書的助言」と「状況」によって裏付けられる必要があります。実際、神がご自分の見解を私たちに伝えるとき、「聖書」「聖書的助言」「状況」「祈り」の四つをすべて合わせて用いることがよくあります。

祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴くのです。



## 第7章

### 弟子って、なに？

主要ポイント： 弟子とは、単に知識を得た者ではなく、キリストのようになりたい者のこと。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。三つの重要な関係は、神、教会、世との関係です。神があなたの人生において、また、あなたの人生を通して成したいと願うすべての事は、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられます。
- 基本的なゴールは、(神と時間を過ごして) 神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。

#### 弟子とは？

イエスは、弟子をつくるようにと教会に命じました(マタイ28章19-20節)。でも、弟子が何かを定義できなければ、弟子をつくれたかどうか分かりません。弟子は「学ぶ者」「生徒」「キリストに従う者」などとよく定義されます。基本的にはそうなのですが、弟子はそれ以上のものです。では、聖書は弟子をどう定義しているのでしょうか？ 新約聖書時代のユダヤ的視点から、弟子について考えてみましょう。

紀元1世紀のユダヤ教教育には、いくつかの段階がありました。まず、子どもたちは5～6歳くらいから、ベート・セーフエル(「本の家」という意味)でトーラー(聖書の最初の五書)を学び始めました。

学びを始める最初の日、ラビは子どもたち全員の石盤をハチミツで覆って「石盤と手についたハチミツをなめなさい」と命じたと言われています。そして、ハチミツをなめる子どもたちに向かって、詩篇119篇103節から「あなたのみことばは、私の上あごになんと甘いことでしょう。蜜よりも私の口に甘いのです」と唱えたそうです。神のみことばをしっかりと受け止めて味わうこと、自分の人生・生活の一部とすること以上に悦ばしく楽しいものは無いと、子どもたちに教えたかったのです。

そこで学ぶ4～5年間で、子どもたちはトーラーの大部分を暗記しました。現に、ベート・セーフエルを10歳で終えるまでに、トーラーを丸暗記する子どもたちもいました。

ベート・セーフエルを終了した子どものほとんどは、そこで学業を終え、家に留まって家業の手伝いをしました。これは当時の人たちが、教育には「聖書理解」と「職業訓練」の二つの要素が必要だと考えたからです。親は子どもの将来を考えて、手に職を身に付けさせたかったのです。したがって、優秀な生徒のみがベート・タルムード(「学びの家」という意味)に進み、聖書の勉強を続けました。

ベート・タルムードでの教育はいつそう厳しいもので、律法(トーラー)に加えて預言書と諸書を勉強し、また、口伝(くでん)律法の解釈(法のおよび解釈的な伝統)も学びました。さらに、そこで聖書の解釈と適用の仕方も勉強して、ユダヤ教特有の「質疑応答の術(すべ)」を身に付けました。

この、教育の第二段階では、深い真理を理解することと、批判的思考のスキルを磨くことに重点が置かれました。西洋式の教育で重視されるのは、情報

のやり取りです。たとえば、生徒が加算表を教えたあとに、教師は「 $2 + 2$ は何ですか？」と尋ねます。子どもたちに「 $4$ 」と答えてほしいからです。私たちの教育システムは、教師が情報を与え、その情報を生徒が教師に反復するという仕組みです。

ところが、イエスが地上におられた頃のユダヤ教育では、ラビは子どもたちに「質問で答える」という答え方を教えていました。教育の焦点が「情報のやり取り」ではなく「情報の理解」に置かれていたのです。たとえば、ラビが「 $2 + 2$ は何ですか？」と尋ねると、生徒は「 $4$ 」と答える代わりに「 $8 - 4$ は何ですか？」または「 $16$ の $25\%$ は何ですか？」と答えていたのです。

生徒が質問形式で答えを言えたら、その生徒が情報をしっかりと処理できている・理解できていることが、ラビには分かるわけです。12歳のイエスがエルサレムの宮でいなくなったことがありました。そのときの様子が、ルカの福音書にこう記録されています。「……イエスが宮で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いていた人たちはみな、イエスの知恵と答えに驚いていた」（ルカ2章46-47節）。イエスは、ちょうどこの頃、ユダヤ教育の第二段階にいました。ラビたちを驚かせたのは、イエスの質問ではなくイエスの理解と答えでした。つまり、イエスの質問形式での答えが、イエスの真理に対する深い理解を明らかにしたのです。

さて、ベート・タルムードが終わる頃には、子どもたちはトーラー以外の旧約聖書の残りの部分もすべて暗記していたはずで、大多数の子どもたちの教育は、この時点で終了しました。そして、最上級レベルの生徒たちだけが、次のベート・ミドラッシュ（「解釈の家」という意味）の教育段階へと進みました。ベート・ミドラッシュに入った生徒たちは、タルミディムと呼ばれました。このタルミディムが「弟子」と訳される言葉です。

ベート・ミドラッシュの教育段階になると、生徒が自分でラビの所に行って「ラビ、どうか私をあなたのタルミディムの一人にしてください。あなたの学びの家に入らせてください」と頼みました。そうするとラビは、その生徒の教育と理解のレベルを見極めるために、いくつもの質問をしました。

そのときにラビが尋ねたのは、「トーラーに含まれる書は何？」とか「獅子の穴に投げ込まれたのは誰？」とか、そんな質問ではありません。「ハバクク書には申命記を参照した箇所が四つあるが、それを参照されている順に答えなさい」というような内容の質問です。ときには、ラビがレメズという別のアプローチを取ることもありました。レメズでは、まずラビがある主題を語

って、そのあとに聖句を引用します。弟子になりたい少年は、その引用聖句が本当にラビの語った主題に当てはまるものか、それとも、引用聖句の前か後の聖句に関係している主題に当てはまるものかを、答えなくてはならなかったのです。目の前に聖書があるわけではないので、その生徒は当然「引用された聖句」「その引用聖句を取り囲む聖書箇所」そして「それらすべての聖書箇所の背景や文脈」も、すでに知っていなくてはなりません。その上で、ラビが引用した聖句が、適切に引用されて解釈されたかどうかを答える必要があったのです。

こうしてラビが知りたかったのは、その少年がトーラーを知っているか、口頭伝承を理解しているか、解釈が分かっているかでした。その生徒がラビの教えや哲学や聖書への取り組み方を理解できるかどうか、さらには、理解した事を最終的に他の人々に教えることができるかどうかを見極めるのが、ラビの目的だったのです。

それぞれのラビの聖書理解は、そのラビのくびきと呼ばれていました。もしラビが、その少年にそれを理解する力があるだけでなく、のちに自らがラビとなって人に教えることができると判断した場合、ラビは少年に向かって「私について来なさい」と告げました。ラビに受け入れられるということは、ユダヤ人にとって、最大級の名誉でした。ラビに受け入れられた時点で、その少年は自分の家族、仕事、村、そして友を離れたのです。

ラビの弟子となった少年の目標は、至ってシンプルです。彼は、ただただ、ラビのようになりたかったのです。ルカの福音書6章40節に「弟子は師以上の者ではありません。しかし、だれでも十分に訓練を受ければ、自分の師のようにはなります」とありますが、弟子はラビがする事をすべて真似ていました。ラビが食べる物と同じものを食べ、ラビが寝るときの体勢をまねて寝ました。さらには、ラビと同じ歩き方をし、ラビと同じように振る舞いました。ラビと同じような癖まで身に付けるほどでした。ラビがくびきを教え、弟子はじっと耳を傾け、じっと見て観察し、ラビのする事すべてに倣（なら）いました。

現代的な弟子訓練が、なぜ失敗に終わるのか、分かりませんか？ 私たちは、弟子を単なる生徒と同じに考えます。生徒は、正しい答えを返せるようになりたくて、教師が知っている事を知ろうとします。これは「弟子とは何か」を完全には捉えていません。

弟子とは「ラビのようになりたい者」のことで、それが、神がすべてのクリスチャンに望むことです。神の御心は、私たちが頭を答え（情報）でいっ

ばいにするものではありません。神は、私たちにキリストのようになってほしいのです。ローマ人への手紙8章29節が「神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです」と言っているとおりです。また、パウロも「あなたがたのうちにキリストが形造られるまで」ガラテヤの教会の人々と働くと、ガラテヤ人への手紙4章19節で述べています。

クリスチャンは、ユダヤ教徒と同じ弟子訓練の道（ベート・セーフエル、ベート・タルムード、ベート・ミドラーシュ）を辿（たど）るわけではありません。それでも、次の教訓を得ることはできます。弟子訓練は、情報のやり取りだけでなく、むしろトランスフォーメーション（変化・変革）です。神の目的は、私たちが聖書に通じた者にするのではなく、キリストに似た者にするることなのです。

弟子の聖書的な定義は何でしょう？ 弟子とは「ラビのようになるために、最終的にはラビの教えをさらにほかの弟子たちに伝えるために、ラビと時間を過ごし（聴く・観察する・真似する）、ラビに従う者」です。

弟子とは、単に知識を得た者ではなく、キリストのようになりたい者のことです。



## 第8章

### キリストにつき従うって、どういうこと？

主要ポイント：キリストにつき従うとは、キリストのようになるということ。

復習：

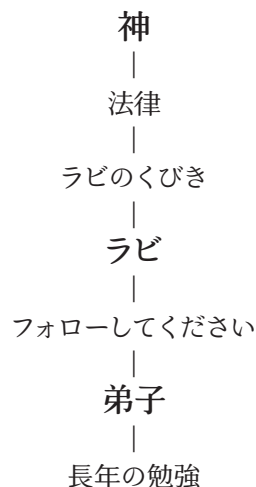
- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。三つの重要な関係は、神、教会、世との関係です。神があなたの人生において、また、あなたの人生を通して成したいと願うすべての事は、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられます。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 弟子とは、単に知識を得た者ではなく、キリストのようになりたい者のこと。



神は、私に何をしてほしいの？

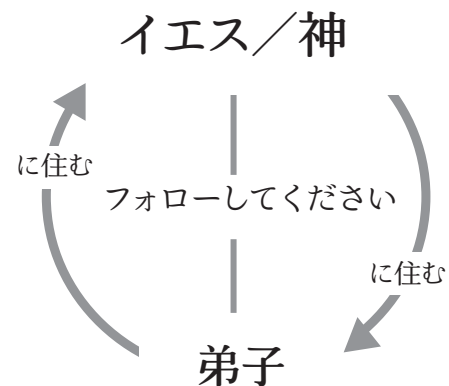
その答えは、イエスの「わたしについて来なさい」です。神が求めるのは、私たちが単に自分をクリスチャンだと称し、教会に通い、聖書を学ぶことではありません。キリストの生き方を尊敬して、キリストの教えに感心することでもありません。神が求めるのは、私たちがイエスについて行くことです。

キリストについて行く（つき従う）とは、キリストのようになる、ということです。つまり、キリストのようになるために（キリストに耳を傾け、観察し、真似て）キリストと一緒に時間を過ごし、最終的には、これから弟子になる者たちにキリストの教えを伝えるということです。



別のラビに従うより、キリストにつき従う方がはるかに易（やさ）しいです。紀元1世紀の弟子がラビのようになりたかった理由は、そのラビが、神に喜ばれるように律法を全うしようとしていたからです。ラビたちは熱心に律法を守る者ではありませんでした。でも、彼らもまた、墮落した罪深い人間でした。だからこそ、確実にトーラー（律法）を守れるように、複雑なくびき（教え）や追加の律法を作り出したのです。その結果、もっと重くて困難なくびきが出来上がり、それによって左の図のような関係が生まれました。

ラビたちが作り上げた関係は、とても複雑なプロセスです。弟子が神につき従って神を喜ばせ、神の戒めに従うためには、この図の一番下から始めなければなりません。長い年月に渡る勉強に励めば、そのあとにやっと弟子になれるかもしれないのです。弟子になれたら、ラビのようになるためにラビにつき従い、ラビのくびきを負い、律法を守りました。そうして、それが神に喜ばれるために十分であることを切に願いました。



それに比べると、キリストにつき従うことは複雑ではありません。イエスは神です。そして律法は、イエスが成就してくれました。さらに、イエスのくびきは負いやすく、イエスの荷は軽いのです（マタイ11章28-30）。私たちクリスチャンが律法を守るのは、神との正しい関係に入るためではありません。私たちは、私たちのラビであるイエスによって、すでに神の御前に義とされています。義とされたからこそ、神への感謝と愛の心から律法を守るのです。なので、キリストと弟子との関係は、左の図のような円形です。

イエスが、私たちに「ついて来なさい」と命じます。そのイエスについて行く（また、イエスにとどまる）ときに、私たちはイエスのようになっていきます（ヨハネ15章1-10節）。とってもシンプルなプロセスなのです。

キリストについて行く（つき従う）とは「キリストのようになる」ということです。あなたの生き方は、キリストの生き方ようになってきていますか？

あなたの人生は、キリストの心を表していますか？ あなたは、人を愛していますか？ 御国の働きに力を注いでいますか？ キリストが仕えたように、人に仕えていますか？ イエスの手本にならって、父なる神との時間を過ごしていますか？

もしそうでないなら、意志の力や自己鍛錬で立ち向かっても、問題は解決しません。解決の方法は、キリストにとどまり、キリストにつき従うことです。そうするときに、キリストがあなたを通して生きてくださり、あなたはキリストのようになっていくのです。



## 第9章

### 弟子はどうやってできるの？

主要ポイント：神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。

#### 復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。三つの重要な関係は、神、教会、世との関係です。神があなたの人生において、また、あなたの人生を通して成したいと願うすべての事は、神との親しい関係からあふれ出るようにして成し遂げられます。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 弟子とは、単に知識を得た者ではなく、キリストのようになりたい者のこと。

- キリストについて行く（つき従う）とは、キリストのようになるということ。

弟子はどうやってできるの？ キリストにつき従うって、どうすればいいの？ クリスマンに「どうしたら弟子はできる？」と尋ねると、たいてい「うちの教会には、すばらしい日曜学校がある」「毎週集まるスモールグループがいくつもある」と、集まりの話を始めます。もちろん、弟子はコミュニティの中でできるのですが、それだけが弟子づくりではありません。

イエスは、どうやって十二弟子を訓練しましたか？ 週に一度集まってバイブルスタディをしたのでしょうか？ イエスは何をしたのでしょうか？

私の教会は、数年前、スタッフのためのリトリートを行(おこな)いました。そのリトリートの中心テーマは『キリストの弟子のつくり方』でした。そこで私たちは、イエスが教えたこと、手本を示したこと、十二弟子と共にしたことを、すべてホワイトボードに書き出しました。さらに、テモテやテトス、マルコと呼ばれたヨハネやその他のクリスマンたちを、パウロがどうやって弟子訓練したのかも書き出しました。そして、そのリストを『愛する』『つながる』『仕える』『委ねる』という四つの見出しの下に整理しました。すべての作業を終えたあと、最後に次の一文を大きな文字で書き加えました。

神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねること  
でキリストを追い求めるときに、弟子はつくられる。

『愛する』『つながる』『仕える』『委ねる』という四つの見出しの下には、次のようなことが書かれていました。

#### 神を愛する

- 神との親しい関係を楽しむ。
- 神のみことば（聖書）を通して神を知る。
- 祈りを通して、神とコミュニケーションを取る。
- 神と一緒に時間を過ごす。
- 神を礼拝・賛美する。

#### 信仰の兄弟姉妹とつながる

- クリスマン・コミュニティ：新約聖書のクリスマンたちは、共に生きることを喜び、楽しんでいた。イエスもパウロも、弟子たちと共に旅をし、共に食事をした。また、共に仕え、共に聖書を学んだ。一緒に時間を過ごしていた。

- 一致団結した歩み: 新約聖書の中の弟子たちは、ミッション・祈り・奉仕・ビジョン・愛・聖書の学びにおいて、一つになっていた。単に集まっていたのではなく、共通の目的と意図をもって一丸となっていた。
- 真の愛: 信仰の兄弟姉妹に対する愛、互いへの愛が、キリストの弟子の特徴だった。

### 世に仕える

- 言葉だけでなく行動で人に愛を示す。
- キリストの手本にならい、人に仕える。
- 人・家族・コミュニティ・国のために力を注ぐ。

### 福音を委ねる

- 神の国の福音を宣べ伝える。
- キリストの教えをほかの人たちに委ねる。
- ほかの人たちに呼びかけて、御国の働きに参加してもらう。
- 弟子が弟子をつくる。

キリストの弟子は、愛して、一つになって、仕えて、委ねるのです。このほかにも、以下のような洞察が浮び上がりました。

- クリスマンにとって重要な三つの関係が、はっきりと分かる。神との関係が一つ目のポイント（愛する）、教会との関係が二つ目のポイント（結びつき）、世との関係が残り二つのポイント（仕えると委ねる）。
- 四つの見出し（ポイント）は、どれも行動指向的。考えをアクティブ化する動詞が、すべてのポイントに含まれている。「愛する」「つながる・一つになる」「仕える」「委ねる」はどれも動詞。弟子訓練は、実践活動的に説明・表現される。
- 弟子をつくるためには、一緒に時間を過ごすことが必要。この点は大変重要。イエスは、愛とつながりの人生・仕えて委ねる人生を、弟子たちに教えた。また、その模範を示しただけでなく、それを彼らと一緒に実践しながら生きた。弟子たちは、イエスと共にそれを体験した。これは、テモテ・ルカ・テスの弟子訓練に力を注いだパウロにも見られるパターン。パウロも、自分が訓練していた弟子たちと一緒に同じ時間を過ごした。遠くからでも指導はできます。群衆を指導することも、クリスマン教育をすることも、ビジョンを投じることもできます。しかし、遠くから弟子をつくることはできません。弟子をつくるには、共に時間を過ごさなければならぬからです。

弟子一人ひとりの信仰の旅路（神と歩む人生）は少しずつ違って見えても、弟子として生きる人生の方向性はみんな同じです。だれでもキリストの弟子であるのなら、神を愛しています。信仰の兄弟姉妹と結びついています。世に仕えています。福音を委ねています。そうしてキリストを追い求めています。

弟子訓練の（実践活動的な）説明・描写は「霊的コンパス」の役割をしてくれます。キリストの弟子として、成長・成熟に向かって確実に前進していく人生を歩みたいのなら、これらの真理（四つのポイント）を自分の信仰生活に照らし合わせてください。そして、どこをどう軌道修正すべきかを神に尋ねてください。その際は、つねに『神を愛する』を霊的な真北に保っていなければなりません。ほかのすべては、神との関係からあふれ出てくるものだからです。

霊的に成長が止まっていると感じている人は、（何が欠けているのだろうか？）と自問してください。霊的に干からびていると感じる人は、霊的コンパスを自分の人生・生活に重ねてみてください。きっと、この四つの側面（ポイント）のどこかに欠けている部分があるはずです。または、十分に実行されていない部分があるはずです。

霊的コンパスは、あなたの神との歩みを即座に分析して洞察を与えてくれます。また（信仰や関係の）次の段階・レベルに進むために、どんな手を打ち、どんな行動を起こせばよいのかを教えてください。自分が今（霊的に）いる場所と、これからの成長のためのアクション・ステップ（対策・実行手順）に、必ず気づかせてくれるはずです。

神を愛し、信仰の兄弟姉妹と結びつき、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられるのです。





## 第10章

### 私は何者？

主要ポイント：あなたの新しいアイデンティティは、キリストのうちにある。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 弟子とは、単に知識を得た者ではなく、キリストのようになりたい者のこと。
- キリストについて行く（つき従う）とは、キリストのようになるということ。

- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。

アイデンティティがキリストのうちにあって、どういう意味？

私たちは、自分の持つアイデンティティによって定義されます。アイデンティティは、たいてい私たちの行動・好み・どこから来たのか・自分をどう見ているかなどに関係しています。たとえば、初めて会う人に何と自己紹介するかを考えてみてください。アルコール依存症のサポートグループに参加する人なら「僕の名前は圭太です。34歳です。アルコール依存症者です」と自己紹介するでしょう。これは、彼のアイデンティティが「彼自身が自分をどう見ているか」に結びついているからです。新しい仕事仲間に「私の名前は木村です。MITメディアラボを卒業しています。そこで建築学を学びました」と言う人もいます。これは、彼女のアイデンティティが「自分のやり遂げた事」に結び付いているからです。このように、アイデンティティは私たちを定義するものです。

キリストが地上に来られる前の私たちの霊的アイデンティティは、「罪」という一文字で定義されました。もし、罪人（つみびと）のサポートグループに参加していたら、「私の名前は  
です。私は罪人です」と自己紹介したはずで、罪が私たちを定義したからです。罪が私たちの以前の状態を定義し、罪が現在の葛藤を決め、罪が今後の未来を定めていたのです。

「罪を犯したことは絶対に無い」と言う人は、ほとんどいません。でも、多くの人はずいぶん「確かに罪は犯したけど、そんなに悪い罪じゃない。私よりもっと悪い人はたくさんいる」と言います。つまり、限定的にしか罪に関わっていないと主張するのです。もちろん、（司法の目で見れば）罪が招く結果はさまざまです。しかし神の御前には、どんな罪でも「罪は罪」です。

この神の視点から、罪について考えてみましょう。たとえば、だれかが金を支払わずにガムを取って、店を立ち去ったとします。その人は、社会的に「泥棒」と呼ばれます。違法行為をした時点で「盗んだ」と見なされるからです。盗んだものが、ガム一つでも、車でも、10億円でも関係ありません。自分のもの



でない物を取れば、泥棒と呼ばれるのです。罪にも同じことが言えます。ちょっとの罪を犯したか、たくさんの罪を犯したかは関係ありません。大きな罪を犯したか、小さな罪を犯したかも関係ありません。罪を犯した瞬間に「罪人(つみびと)」の名が付くのです。

「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず・・・」と、ローマ人への手紙3章23節は言っています。私たちはみんな、墮落した(罪を犯す)状態にあり、神の目には「罪人」と見なされています。ところが、イエスが、私たちの罪の代価を十字架の上で支払ってくれました。イエスは十字架の上で、私たちの(過去・現在・未来の)罪の負債を赦してくれたのです。コリント人への手紙第二5章17節は「ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」と言っています。イエスは、私たちの以前のアイデンティティに磨きをかけたわけではありません。キリストにある真新しいアイデンティティを与えてくれたのです。

キリストを信じる前の私たちは、霊的に「罪人」と見なされていました。しかし、キリストにある私たちは、霊的に「聖徒」と見なされます。あなたは「イエスにある新しいアイデンティティ」をもらったので、もう自分の行い(それが善行でも悪行でも無関心でも)によって定義されることはありません。あなたは「キリストがどのような方か」によって定義されます。キリストがあなたを何者と呼ぶかで、あなたが何者であるかが決まるのです。あなたのアイデンティティ(あなたという存在そのもの)は、キリストのうちにあるのです(コロサイ3章3-4節)。

「神の視点から自分を見ること」を学ぶことが、クリスチャン・ライフの大部分を占めています。それが、容易にできることではないからです。現に、自分の過去や周りの人たちは、私たちを定義しようとします。私たち自身も、自分を定義しようとします。そのためのレッテルや呼び名をあげたら、切がありません。「私は牧師」「私は教師」「私はビジネスオーナー」「私はパイロット」「私は銀行の支店長」……。そう言って、私たちは自分を定義します。でも、霊的な見地から見ると、それは正しくあ

りません。キャリアは、あなたの仕事であって、あなたが何者かではありません。あなたの過去は、あなたが「何者だったか」であって、「今、何者か」ではありません。キリストのうちにあるのなら、あなたは新しく造られた者です。あなたのアイデンティティは、キリストのうちにあるのです。

あなたのアイデンティティは、神によって定義されなければなりません。下記のリストは、神の視点から見た「あなたが何者か」を教えています。

あなたは何者？

- 地の塩、地の光(マタイ5章13-14節)
- 神の子ども、神の家族の一員(ヨハネ1章12節、ローマ8章16節)
- まことのぶどうの木(ヨハネ15章1-5節)
- キリストの友(ヨハネ15章15節)
- 主の実を結ぶために、キリストに選ばれて任命された者(ヨハネ15章16節)。
- キリストの証し人(使徒1章8節)
- 義の奴隷(ローマ6章18節)
- 神の子ども(ローマ8章14-15節、ガラテヤ3章26節、4章6節)
- キリストの共同相続人(ローマ8章17節)
- 神の宮(第一コリント3章16節、6章19節)
- 主と交わる者(第一コリント6章17節)  
キリストのからだの部分(第一コリント12章27節、エペソ5章30節)
- 新しく造られた者(第二コリント5章17節)  
神と和解して、和解の務めを与えられた者(第二コリント5章18-19節)
- 神の子ども、キリストにあって一つ(ガラテヤ3章26節、28節)
- 聖徒(第一コリント1章2節、エペソ1章1節、ピリピ1章1節、コロサイ1章2節)
- 神の作品(エペソ2章10節)
- 聖徒たちと同じ国の民、神の家族(エペソ2章19節)
- キリストの囚人(エペソ3章1節、4章1節)
- 義と聖である者(エペソ4章24節)
- 国籍が天にある者、今、天上に座っている者(エペソ2章6節、ピリピ3章20節)
- キリストとともに、神のうちに隠されている者(コロサイ3章3節)
- キリストのいのちの現れ(コロサイ3章4節)

- 神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者（コロサイ3章12節、第一テサロニケ1章4節）
- 光の子ども、闇の者ではない（第一テサロニケ5章5節）
- 天の召しにあずかっている、聖なる兄弟（ヘブル3章1節）
- キリストにあずかる者（ヘブル3章14節）
- 生ける石（第一ペテロ2章5節）
- 選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民（第一ペテロ2章9-10節）
- 旅人、寄留者（第一ペテロ2章11節）
- 悪魔の敵（第一ペテロ5章8節）
- 今すでに神の子ども（第一ヨハネ3章1-2節）
- 神によって生まれた、悪い者（悪魔）が触れることのできない者（第一ヨハネ5章18節）
- 神の牧場の羊。必要なものすべてを持つ者（詩篇23篇、100篇）

これらを、引用聖句と合わせてじっくりと学んでください。そして、真理によって思いを一新してください（コロサイ3章10節）。このリストは、単に「ぱっと読んで、信じて、次に進む」という類のものではありません。何度も読み返し、じっくり学ぶものです。深く考え、何度も戻って参照し、クリスチャン生涯を通して「私があなたにあって何者かを、思い出させてください」と神に祈るものです。

あなたのアイデンティティは、キリストのうちにあります。



## 第11章

### 弟子として、どう歩めばいいの？

主要ポイント：キリストを受け入れたときのように、キリストにあって歩む。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- あなたの新しいアイデンティティは、キリストのうちにあります。

「このように、あなたがたは主イエス・キリストを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。」(コロサイ2章6節)

キリストにあって、どう歩めばいいの(どう生きればいいのか)?

まず、話を少し戻して、基本的な質問をします。あなたは、どのようにキリストを受け入れたのでしょうか? 答えは「恵みのゆえに信仰によって」です(エペソ2章8節)。自分の長所や善行のおかげで、キリストを受け入れたわけではありません。また、自分の力でキリストを見極めたからでも、自分の思考力で分かったからでもありません。良い家庭に生まれたからでも、良い教会に通ったからでもありません。

あなたがキリストを受け入れたのは、神の恵みによるのです。神が語った事(あなたの罪、神から切り離された霊的状态にあること、救い主を必要としていることに関する神のみことば)を信じたので、あなたはキリストを受け入れました。あなたの罪のためにイエスが十字架で死んだこと、三日目よみがえったこと、キリストを信じて罪を悔い改める者に永遠のいのち(和解した関係)が与えられることを信じたから、キリストを受け入れました。神の恵みのゆえに、信仰を通して、神との関係に入ったのです。神が恵みを与え、あなたは信仰で応答したのです。

聖書は「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」(使徒の働き16章31節)と訴えます。神が恵みを与え、私たちは信仰で応答する。だからこそ、エペソ人への手紙は「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです」(2章8節)と言うのです。ヨハネも「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった」(ヨハネ1章12節)と書いています。私たちは、神の恵みのゆえに、信仰を通してキリストを受け入れました。そして、キリストを受け入れたときと同じように、キリストにあって歩むのです。

キリストにある歩みには、恵みと信仰という二つの部分があります。基本的な恵みの定義は「受けるに値しない者に対する神の好意。労せずを得た、神からの身に余る好意」です。もちろん、これは神学的に正しい定義なのですが、実用的ではありません。恵みとは「私たちが自分でできない事を、私たちのうちに(または、私たちを通して)神が成してくださる」ということなのです。

- 私たちは自分を救えない。しかし神が、私たちのできない事を私たちのうちにしてくださった(これが恵み)。
- 私たちはクリスチャンの歩みができない。しかし神が、私たちにできな

い事を私たちを通してしてくださる(これが恵み)。

- 私たちは、御国の働き・ミニストリーができない。しかし神が、私たちが自分ではできない事を、私たちを通してしてくださる(これが恵み)。

私たちは、自分の力ではなく神の恵みに頼ることを学んで、キリストのうちに歩いていくのです。では次に、信仰について考えてみましょう。

ヘブル人への手紙に「『わたしの義人は信仰によって生きる』・・・信仰が無ければ、神に喜ばれることはできません」(10章38節、11章6節)とあります。パウロは「私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます」(第二コリント5章7節)と書いています。またイエスは、どうやって神の御国の働きに参加すればよいかを尋ねられたとき、「神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです」(ヨハネ6章29節)と答えています。

私たちは信仰によって生き、信仰によって歩み、信仰によって働くのです。つまり、キリストを受け入れたときと同じようにして、信仰によってキリストのうちに歩いていくのです。

では、このことを実践的に考えてみましょう。たとえば、あなたには怒りをコントロールできないという問題があり、何らかの依存症も抱えていて、夫婦関係の修復を祈っているとします。そんな状況の中で、子どもの救いの心配や経済的な問題も抱えている、または、うつ病・悩み事・孤独・過去の傷・試練・将来への不安などに悩まされているとします。そんな場合、あなたは どうしますか?

「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい」(コロサイ2章6節)とパウロは言います。あなたは、どのようにキリストを受け入れ、救われたのですか? 恵みによって信仰を通して救われました! あなたは、キリストのうちにどのように歩むのでしょうか? 恵みによって信仰を通して歩むのです! ですから、神の恵みに頼る信仰で生きてください。

クリスチャンの歩みについて、聖書は「信仰か、または、わざ(行(おこな)い・働き)か」と言いません。「信仰によるわざ(行い・働き)」が肝心なのです。これは重要なポイントです。ヤコブの手紙2章18節にこう書かれています。「『ある人には信仰があるが、他の人には行いがあります』と言う人がいるでしょう。行いの無いあなたの信仰を私に見せてください。私は行い

によって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。」 真の信仰は、その信仰に影響・刺激されたわざ・働きに現れます。

「信仰によって生きる」とは、「わざ・働きを止(や)める」という意味ではありません。「神に応答して行動する」という意味です。私たちは、神が導いてくださると信じて神に頼ります。だからこそ、神が導くとき、神に従います。私たちは、神の備えを信じています。だからこそ、神が備えてくださるとき、それを受け取ります。私たちは、神が支えてくださると信頼します。ゆえに、神が祈ることや聖書を読むことを促すとき、神と時間を過ごすことや聖書の助言を得ることを促すとき、私たちは従うことで応答します。このように、私たちの行動・わざは、私たちの信仰から湧き出てくるのです。

キリストを受け入れたときのように、キリストにあって歩むのです。



## 第12章

### うして教会は重要なのか？

主要ポイント: コミュニティの中でしか、成長できないことがある。

復習:

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。
- 基本的なゴールは、(神と時間を過ごして) 神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- あなたの新しいアイデンティは、キリストのうちにある。



- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- あなたの新しいアイデンティティは、キリストのうちにある
- キリストを受け入れたときのように、キリストにあって歩む。

教会にはどんな意味があるの？ ほかのクリスチャンと集まることが、どうして大切なのか？

教会が重要なのは、クリスチャン・コミュニティの中でしか、成長できないことがあるからです。

キリスト教はチームスポーツのようなものであって、みんなで団結して協力しながら追い求めるものです。したがって、あなたを創造した神が意図した姿に成長していきたくれば（神が意図するすべてに成りたいなら）、それは聖書的コミュニティの中でしか起こり得ないのです。

「聖書的コミュニティ」とは、単に日曜日に教会に行くことではありません。そして、バイブルスタディに参加する以上のこと、クリスチャン仲間と食事する以上のことです。コミュニティとは、共通の目的・意図のもとに一つになって同じゴールを目指し、キリストの御国の民として共に生きることなのです。

十二弟子は、キリストに従うように召されました。それは一年間のインターンシップに召されたわけではありません。キリストの弟子として共に歩む一生、一緒に生きていく人生に召されたのです。

彼らは共に追い求めた。

- イエスが教えたとき、弟子たちはイエスと共にいた。（マタイ5章1節～7章29節）
- イエスが仕えたとき、弟子たちはイエスと共にいた。
- イエスが奇跡を行（おこな）ったとき、弟子たちはイエスと共にいた。（マタイ8章23-27節）

彼らは共に奉仕した。

- イエスが、五千人と四千人の空腹を満たしたとき、弟子たちは共に奉仕した。
- イエスは、十二弟子と弟子70人を送り出したとき、二人ずつ一緒に送り

出した。（マルコ6章7-13節、ルカ10章1-16節）

彼らは共に疑問を持った。

- キリストの難しい教えが分からなかった。（マルコ8章）
- キリストのアイデンティティについて疑問を持った。（マタイ8章27節）
- イエスの奇跡が理解できないこともあった。

彼らは共に学んだ。

- 「主よ、私たちに祈りを教えてください。」（ルカ11章1-13節）
- 山上の垂訓（マタイ5-7章）
- たとえ話（マタイ13章）

彼らは共に愛した。

イエスは、ヨハネの福音書13章34-35節でこう言った。「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります」

彼らは共に励まし合った。

ルカの福音書22章31-32節で、イエスはシモン・ペテロにこう言った。「サタンがあなたがたを麦のようにふるいにかけてを願って、聞き届けられました。しかし、わたしはあなたのために、あなたの信仰がなくならないように祈りました。ですから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」

彼らは共に任務を遂行した。

マタイの福音書28章19-20節で、イエスは弟子たちにこう命じた。「ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいて、すべてのことを守るように教えなさい・・・」

このように、弟子たちは共にキリストを追い求め、共にキリストについての疑問を持ち、共にキリストから学びました。共に愛し合い、共に励まし合い、共に任務を遂行しました。そして、一緒に旅をし、一緒に食事し、一緒に住みました。意図的に共に生きることが、彼らの人生を織り成したのです。

キリストは、競争や争いの環境ではなく、コミュニティが成長を助ける環境をつくりました。弟子たちは、独りではありませんでした。独りで考えたり解決したりしなくてよかったのです。励まし力づけ、アカウントビリティ（従順で聖書的な信仰生活を送るよう励まし合うこと）を提供するコミュニティに、一体感・信頼関係・友情・様々な賜物を提供してくれるコミュニティに、しっかりと置かれていたのです。

コミュニティの中でしか、成長できないことがあるのです。



## 第13章

### 神の国って、なに？

主要ポイント： 「神の国とは、人が神と正しく関係するという結果をもたらす、この世における神の主権の働きのこと」 — ヴァンス・ピットマン

復習:

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- キリストについて行く（つき従う）とは、キリストのようになるということ。

- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- あなたの新しいアイデンティは、キリストのうちにある
- キリストを受け入れたときのように、キリストにあって歩む。
- コミュニティの中でしか、成長できないことがある。

## 神の国って、なに？

神の国とは、人が神と正しく関係するという結果をもたらす、この世における神の主権の働きのことです。この「神の国・天の国」を理解しない限り、この世における神の究極的な御心を知ることはできません。

神の国は、キリストの教えの中心でした。イエスは、天の国の福音を伝えるために来たのです。

イエスが初めて語ったメッセージが「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」だったことは、マタイの福音書4章17節が記録しています。また、マタイの福音書4章23節には「イエスはガリラヤ全域を巡って会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え・・・」とも記されています。

マタイの福音書5章には、イエスの説教で最も有名と言える『山上の垂訓』が記録されています。イエスが開口一番に語ったのは、3節にある「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」という言葉です。10節にも「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」とあります。

19節も御国についてです。20節も御国についてです。マタイの福音書6章の祈りの手本も、御国を語っています。またイエスは、私たちが御国に心を注ぎ、御国に重点的に取り組んでいれば、必要な物はすべて与えられると教えました（マタイ6章33節）。事実、山上の垂訓には「天の御国」がいく度もでてくるので、「御国の憲法」とも呼ばれています。

イエスは、ユダヤ人会堂で（マタイ4章23節）山で（マタイ5-7章）、天の御国を説きました。たとえ話でも（マタイ13章）祈りでも（マタイ6章9-13節）、天の御国を説きました。子どもたちを指して御国の国民を説明し（マタイ19章14節）、弟子たちを遣わして御国のメッセージを宣べさせました（マ

タイ10章9節とルカ10章8-9節）。神の御国での偉大さがどんなものかを説いて、高ぶり・プライドをとがめました（マタイ18章1-5節）。そして、弟子たちが最後の晩餐で嘆き悲しんでいたときにも、御国での再会に彼らの目を向けさせました（マタイ26章29節）。

こうしてイエスは、ルカの福音書4章43節で「ほかの町々にも、神の国の福音を宣べ伝えなければなりません。わたしは、そのために遣わされたのですから」と言ったとおりに、御国のメッセージを語り続けたのです。

天の御国を説いている聖書箇所は、ほかにもあります。

- 神の国は、世界中のクリスチャン（キリストを信じる者たち）から成っている。（マタイ8章11節、黙示録5章9-10節）
- 神の国は、幼子のような信仰で入る。（マタイ18章3節）
- 神の国は、謙虚さを高く評価する。（マタイ18章4節）
- 神の国は、神の力によって影響を及ぼし、効果を発揮する。（第一コリント4章20節）
- 神の国は、拡大している。（マタイ24章14節）
- 神の国は、とこしえ。（黙示録11章15節）

## 私たちの役割は何？ 神の国の働きに、どう関わればいいのか？

神の国は、天では完全に認識されていて、地では常に広がり続けています。御国が地で拡大するのは、神の民を通して御国が確立されるように、神ご自身が定めたからです。人がキリストを信じて神の家族に加わるとき、御国は成長します。教会が地の果てに福音を宣べ伝えるとき、御国は広がります。一人ひとりのクリスチャンが、自分の住む場所・職場・友人関係の中で「地の塩」となり「世の光」となって生きる時、そこに神の力が働き、御国が拡大していくのです。

神の国の働きに参加する方法を、ここに幾つかあげておきます。

- 神を知ること集中して、神があなたを通して生きてくださるよう祈る。
- 福音を宣べ伝え、ほかの人たちを弟子として訓練し、国々にキリストのメッセージを運び、大宣教命令を遂行する。（マタイ28章19-20節）
- 神の国の前進のために祈る。
- 短期間の伝道旅行に参加する。
- 教会開拓に参加する。
- 御国の機会と前進のために、時間・能力・財力を使う。
- 神に置かれた場所で、地の塩・世の光となって生きる。（マタイ5章13-16節）

神の国とは、神と正しく関係するという結果をもたらす、神の主権の働き。



## 第14章

### 学んだ事を、どうすればいいの？

主要ポイント：神から委ねられた事を、ほかの人々に委ねる。

復習：

- 福音は、人を救って聖める神の良い知らせ。福音を超える成長などない。
- キリスト教の本質は関係。
- 基本的なゴールは、（神と時間を過ごして）神を知ること、そして神があなたを通して生きてくださること。
- 神と時間を過ごす理由・動機は、神への愛。
- 聖書は、すべての信条・経験・行動の最終的権威。
- 祈りは、神との会話。私たちは、神に話して神に聴く。
- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- キリストについて行く（つき従う）とは、キリストのようになるということ。



- 神を愛し、信仰の兄弟姉妹とつながり、世に仕え、福音を委ねてキリストを追い求めるとき、弟子はつくられる。
- あなたの新しいアイデンティは、キリストのうちにある。
- キリストを受け入れたときのように、キリストにあって歩む。
- コミュニティの中でしか、成長できないことがある。
- 神の国とは、人が神と正しく関係するという結果をもたらす、この世における神の主権の働き。

『大宣教命令』と呼ばれているマタイの福音書28章16-20節は、イエスが天国に戻る（昇天）直前のシーンです。そのとき、イエスは弟子たちに最後の命令を下します。

「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示された山に登った。そしてイエスに会って礼拝した。ただし、疑う者たちもいた。イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。』」

この聖句から、次のことが分かります。

- イエスの弟子たちは、まだ疑いを持っていた。 彼らは多くを目にし、体験し、学びました。それを経ても、疑念を抱く者はいました。なので、難しい真理を前に葛藤を覚えたとしても、あまり自分を責めないことです。疑問・疑念のすべてが解消されていなくても、福音を伝えてよいのです。学びつつ、伝えていけばよいのです。
- 弟子は、出て行くために召されている。 私たちは、集まって話し合うだけのために召されているではありません。それぞれが出て行き、弟子をつくり、弟子を育てなければならないのです。
- 弟子は、キリストが命じたすべてのことを守る。 イエスは「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい」と言いました。この守るという言葉は、厳守する・厳密に従うという意味です。

弟子とは、単にキリストの真理を知る者たちではありません。キリストの真理を厳守する（厳密に従う）者たちのことです。弟子は、知っている事を実行・実践するのです。

- 弟子は、キリストのくびきを、ほかの人々に委ねる。 イエスは、私たちに「あらゆる国の人々を弟子とせよ。わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい」と明確に命じています。私たちはキリストから委ねられた事を、ほかの人に委ねていかなければなりません。

委ねるとは、何らかの責任を持たせる、ということです。私たちが「キリストが命じたすべてのことを守るように教える」なら、そう教えられた人には、それに従って生きる責任があるのです。

ユダの手紙3節は、次のような言葉があります。「愛する者たち。私たちがともにあずかっている救いについて、私はあなたがたに手紙を書こうと心から願っていましたが、聖徒たちにひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに進める手紙を書く必要が生じました。」この聖句にある信仰とは、「キリストの教え・福音」という意味です。また、ここで伝えられたと和訳されているギリシャ語は、英語の聖書では委ねると訳されています。

パウロは、ローマのクリスチャンたちに「神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、伝えられた【委ねられた】教えの規範に心から服従し・・・」（ローマ6章17節）と言いました。罪の奴隷を心から服従する者に変えることができる唯一の教えは、イエス・キリストの福音だけです。

また、パウロはガラテヤ人への手紙2章7節で「ペテロが割礼を受けている者への福音を委ねられているように、私は割礼を受けていない者への福音を委ねられている・・・」と述べています。福音をユダヤ人に伝える責任がペテロに与えられたように、福音を異邦人に宣べ伝える責任がパウロに与えられました。二人とも、福音メッセージを委ねられたのです。

さらに、テサロニケの教会の人々に「むしろ私たちは、神に認められて福音を委ねられた者ですから、それにふさわしく・・・語っているのです」（第一テサロニケ2章4節）とパウロは言っています。

テモテに対しては「多くの証人たちの前で私から聞いたことを、ほかの人にも教える力のある信頼できる人たちに委ねなさい」（第二テモテ2章2節）と命じています。

神から委ねられた事を、ほかの人々に委ねなければなりません。

#### 実践的アドバイス

- 自分の知り合いから始める。（例・家族、友人、職場の同僚、近所の隣人）
- 学びながら人に伝える。（福音を伝えるのは、知識や成長が十分なレベルに達してからにしよう）と考えないで、今日学んだ事をどんどん委ねてください。
- 人に信じさせることは、あなたの仕事ではない。あなたの役目は、自分が学んだこと、見たこと、個人的に体験したことを伝えること。あとは、人を招く神の御霊に任せる（使徒の働き1章8節）。
- この手引書の内容を伝える。
- 世界を一夜にして変えようとしな。委ねる機会が与えられるように祈る。そして、神が機会を与えるときに、その都度、伝えていく。

頭にすぐ浮んでくる人たちの名前を書いてください。

THIS IS THE  
GOSPEL

[ThisIsTheGospel.com](http://ThisIsTheGospel.com)